

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 28 日現在

機関番号：31303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25820317

研究課題名(和文) 銅版画に描かれる明治期農家の屋敷構えとその変容過程に関する研究

研究課題名(英文) Study of the Meiji era farmers residence stance and its transformation process drawn by copper engraving.

研究代表者

不破 正仁 (Fuwa, Masahito)

東北工業大学・工学部・講師

研究者番号：20618350

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、農家の屋敷構えの変遷を明らかにすることを目的に、明治期銅版画を主史料として、屋敷内の建物および屋敷林に焦点を当て、明治期と現在との対比により変化の傾向を検証するものである。その過程において、(1) 景観構成要素の復元的分析、(2) 屋敷構えの一体的な把握と広範囲分析を行った。これらの作業により、近代化による変化を受ける前の状況を共時的に把握できたとともに、屋敷構えを体系的に理解する際の枠組みのひとつとなる、屋敷林の類型(系統)を示した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the building layout of farmers. This study's main historical sources are the Meiji era copper engraving, and intend to verify the trend of transformation in comparison with the Meiji era and the present by focusing on a building in the residence and a premises forest. In the process, this paper reviews (1) Restoring analysis of landscape components, (2) Integral understanding and extensive analysis of building layout. The result shows the previous situation that undergoing transformation due to modernization could synchronic grasp, as well as the type of one to become premises forest of framework for understanding the building layout systematically.

研究分野：建築史・意匠

キーワード：屋敷構え 屋敷林 民家 明治期 日本博覧図 銅版画

## 1. 研究開始当初の背景

屋敷構えとは、屋敷の構成のことであり、一般に屋敷全体の見栄えのことを意味している。居住者は、建物だけでなくその配置や屋敷林などの周辺環境を整えることにも注意を払うことで、同時に居住性をも高めてきた。

これらの集合体としての農村景観は地域固有のものであり、重要な地域資源のひとつであるといえる。また、それらの景観は変化することが必然的な状況にあるものも少なくない。一方で、農村景観の変容とは、単に既存のものが消失するばかりではなく、継承、増減など屋敷内の各要素に応じた変化の傾向があるのではないかと考えている。

しかし、この傾向の生じた理由・プロセスは従来の研究からは未だ明らかではなく、i) 過去の史料に基づいて現状と比較検討すること、それらを ii) 一定の広がりを持った地域を網羅的に分析すること、そして iii) 農家を「屋敷構え」として  $\alpha$ . 屋敷内の建物、 $\beta$ . 屋敷林を一体的に分析することによって、現状に至る景観変容プロセスについての新たな理解の枠組みを提示することが必要であると痛感するに至った。なにより、様々な圧力により農家・農村の姿は急速に変化し続けており、その原型を理解するためにはこれら i) ~ iii) の把握は喫緊の問題であるともいえる。

屋敷構えを取り上げた研究としては、三橋伸夫ら(2010)「宇都宮市における長屋門のある屋敷構えに関する研究」、月舘敏栄ら(2010)「遠野物語の舞台になった傾斜地にある山口集落の農家の屋敷構え」、黒野弘靖ら(2008)「新潟市高畑における集落構成と屋敷構えの対応関係」などいずれも屋敷配置を詳細に調査し、調査屋敷を相互比較することで配置特性を明らかにしたものがある。また、平山育男ら(2007)の「和歌山県橋本市橋本における屋敷構えの変遷」のように古文書などを用い屋敷構えの変遷を考察したものもあり、各地域の研究において屋敷構えについての一定以上の成果が既に報告されているともいえる。ただし、これまで建築物の配置や集落内の配置特性についての詳細な記述はあるが、その他の要素(屋敷林等)との一体的な検討は十分に行えていない。また、当該地域の分析に依拠しているため、それらの特性が当該地域固有のものなのか、広範囲に及ぶ普遍的なものなのかの解明には至っていない。そして、変容過程の考察は依然として方法上困難が認められる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、農家の屋敷構え( $\alpha$ . 屋敷内の建物、 $\beta$ . 屋敷林)を対象とし、明治期銅版画を主史料として、以下に示す二つの仮説

を基に農家の近代化の傾向を検証することにある。すなわち、

- I) 生活スタイルの変化に伴い  $\alpha$ . 付属屋が減少し、屋敷配置に影響を及ぼした可能性がある。
- II) 生活・生業の変化に伴い  $\beta$ . 屋敷林の存在意義が薄れ、結果的に緑量が減少傾向にある。

などの近代化の傾向の実態を把握し、その過程の中で如何なるものが継承され、如何なるものが捨象されてきたのかを検証する。この傾向を検証するため、 $\alpha \cdot \beta$  を一体的に捉え「屋敷構え」として前近代の状況把握とその遺構の現存調査・実測調査をもととした分析を行う。

## 3. 研究の方法

上記の二つの近代化についての仮説を検証する上で、以下の二つの作業を行った。

### (1) 景観構成要素の復元的分析

民家の付属物である付属屋や屋敷林は、近代化・都市化の影響による生活・生業の変化に伴い消失・改変を余儀なくされてきた。必要性の薄れた建物(ハイゴヤ・厠・風呂等)は、取り壊し、内室化、用途転用が行われてきたことが推察され、建物の老朽化に伴い取り壊しが進んできた現状もあり、かつての状況とは異なることが推測される。屋敷林については、存在意義が薄れ伐採・放置されるケースも少なくない。分析対象とする付属屋や屋敷林は、近代化の影響で変化し易い要素なのではないかと考えられる。そのため、現状調査のみでは如何なる要素が従来の屋敷構えを構成していたかを検討するのが困難な状況である。したがって、何らかの史料を用いて往時の状況を復元的に分析する必要がある。

### (2) 屋敷構えの一体的な把握と広範囲分析

これまで、農村景観については既往研究で対象としてきた屋敷林のような外部空間の研究と主屋・付属屋などの建築物の研究とが区別されて理解されることが多かった。これに対し、本研究では、付属屋などの建物の種類・配置・棟数など建築物の構成を網羅的に把握の上、屋敷配置を分析しようとすることに加え、屋敷林などの外部空間の要素をも含めた屋敷構え全体の分析ができる点に特色がある。とくに、関東地方という一定の広がりのある地域を対象とすることで、普遍性のある分析が可能となるとも考えている。

具体的には、付属屋については史料分析(明治期銅版画の解析)を行い、関東地方について網羅的に分析し明治期における付属屋の種類とその分布を明らかにする。現地

はそれらの同定作業を行うことに限定した。屋敷林についてはこれまでの研究で分析を終えている地域を除く埼玉・神奈川・群馬を中心に分析を行う。

#### 4. 研究成果

##### 1) 景観構成要素の復元的分析

##### ①明治期の絵画史料分析の意義

近代化の傾向を把握するために、もっとも重要なことは通時的解釈を試みることである。とくに、現状調査のみでは如何なる要素が従来の屋敷構えを構成していたかを検討するのが困難な状況である。したがって、何らかの史料を用いて往時の状況を復元的に分析する必要がある。

そこで、本研究において史料として用いるのは、関東地方の邸宅が描かれた明治期の銅版画である。本研究で主史料とする明治 20 年代の銅版画は、明治 30 年代に入り写真が主流となる直前のもので、当時最も精巧な記録媒体として位置づけられており、そのため極めて精緻な筆致で描かれている。とくに重要なのは、本研究に使用する銅版画が俯瞰的に描かれている点である。銅版画には、大きく 2 種類のものがある。一つは、『東京商工博覧絵』に代表される商家のファサードを描いたものである。もう一方は、『大日本博覧絵』『大日本博覧図』『日本博覧図』などで、編者・タイトルに若干の異同はあるものの、俯瞰的に描くことが特徴で描写手法などが共通している。これは、農家のような屋敷の分析に適しているといえよう。「日本博覧図」のような銅版画は、屋敷を俯瞰的に描き出すために、予め配置図をとらせその後銅版画として描き上げるという手法をとっている。そのため、屋敷の構成を細部まで比較的忠実に記録している。前者を取り上げた研究はいくつか散見されるが、後者を用いたものは少なく、屋敷全体を取り上げた研究はない。本研究で扱う「明治期の銅版画」とは、後者の「日本博覧図」のことである。対象となる銅版画は、現在のところ 1,822 枚発見できており、この他にも数編、未発見のものがある。それらを合せると 3,000 枚程度になると予想され、これらを用いることで一定の広がりのある地域を網羅的に分析出来るのである。

また、明治前期は、付属屋及びその他の要素（屋敷林など）の充実期としての理解が可能なのではないかとも考えている。すなわち、明治期銅版画には近代化や都市化の影響を受け各要素が減少する前の状態が記録されていたと考えている。厳密には明治期は近代であるが、明治前期の絵画史料（銅版画など）には近代化の影響を受ける前の状況が記されている可能性がある。以上のように、明治期銅版画を分析することは、明治という一時代を切り取るのではなく、近代化前の状況を知る重要な手掛かりであると捉えている。

##### ②史料分析と網羅的作業の意義

ここでは、埼玉の屋敷構えの分析を事例に、復元的網羅的分析の成果を示しておく。

当地域の屋敷林の構成は、関東地方内の北方系・南方系としてきた屋敷林の構成のうち、それぞれの主要なパターンが単純に充実している場合や、複数のパターンが同時に出現する場合が見られることなど、北方系・南方系屋敷林の構成が多様に組み合わせられているという理解が可能である。一方で、当地域の分析のみでは北南両系統のような特徴を見いだすことはできなかったともいえる。この点では、関東地方というある一定の広がりの中で検討してきたことが一定以上の成果を上げているといえ、その考察を基に当地域の屋敷林が関東地方の中でもより発達していたと考えることもできよう。これは、以下に示す 4 つのタイプの屋敷構えの様子からわかる。（数値の詳細は、発表論文参照）

**屋敷後部の発達** 当地域では、55 軒中 46 軒（84%）で「屋敷背後林」が描かれていた。図 1 のように周辺に田畑が描かれる状況でも屋敷背後林が発達している。樹種は、針葉樹と推察されるものが多く、何層にもなる樹林帯がみられた。これらの特徴は、栃木県で見えてきた北方系のものと共通するが、より発達したものであるとみることもできる。なお、このタイプでは付属屋は主屋前面に設けられる傾向にある。



図 1：何層もの樹林帯からなる屋敷背後林

**生垣の多用** 図 2 の銅版画には左下に生垣が二重に巡らされており、高い生垣と低い生垣が組み合わせられて使われている場所もある。このように生垣の利用も盛んであったことが窺え、低いものが多くを占めているものの出現頻度は 78%と関東で最も高い値であった。千葉県で見えてきた南方系では、生垣が発達し高い生垣で囲われていることが特徴の一つで、その反面、面状樹木の出現頻度が低いことを指摘していた。しかし、当地域では「生垣」と「面状樹木」が同時に高い出現頻度であり、この点は特徴として挙げておく必要がある。なお、生垣の高さは周辺の付属屋との対比により推定した。

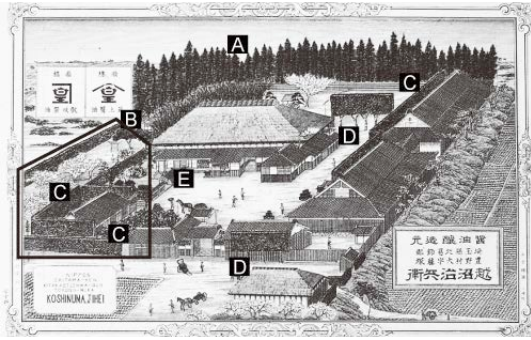


図2：生垣の巡らされる屋敷

**複数パターンの同時出現** もっとも、このようなタイプは、付属屋が多くより大規模な屋敷であるともいえる。10以上の付属屋とそれらと関係のある樹木構成をみることができる。当地域では5パターン以上が同時に設けられる屋敷が16件あり、そのうち6パターン以上が3件、7パターン以上が2件みられるなど、多様な構成であることが窺える。図でも複数のパターンが同時に出現しており、かつB.大木と祠やG.植栽棚のように同パターンが2つ以上出現していることも判る。

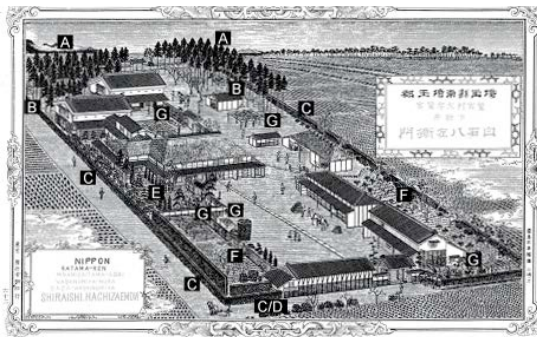


図3：屋敷内に複数パターンが配されている

**面状樹木の同時出現** 蔵の傍に面状の樹木が配されることがある。当地域は、この「面状樹木」が関東の中で最も高い出現頻度である。これは、付属屋の出現数の傾向とも一致する。一つの屋敷内に同時に出現する場合もあり、面状樹木が出現した屋敷15件中、一つの屋敷内に2つ以上あるものが12件、3つ以上が3件と極めてその出現頻度が高いことが判る。付属屋の種類によって用途が異なることも特徴で、蔵の場合は「火除け」、茅葺屋根の付属屋の場合は「風除け」である。

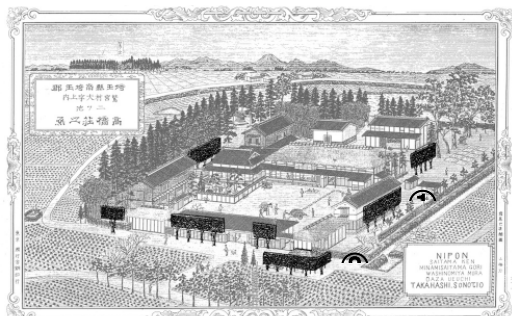


図4：一屋敷に面状樹木が7ヶ所みえる

## 2) 屋敷構えについての広範囲の解釈

### ①広域把握の意義

本研究において関東地方という広がりを対象としたことは結果として、ある地域に限定された配置構成にならず、一定の広がりの中で分布や地域的な傾向を分析することを可能とした。屋敷林に限定していえば、樹木構成パターンを抽出する際に多くの樹木要素を検討できたことに加え、パターンの組み合わせによる地域的な傾向を見出すことができた。

	A 屋敷背後林	B 大木と祠	C 生垣	D 面状樹木	E 庭置空間	F 屋敷垣	G 植栽棚	H 数個としてのツツジ
北方 243	53 <sup>(130)</sup> 広<針	43 <sup>(185)</sup> 広>針	22 <sup>(54)</sup> 高<低	24 <sup>(59)</sup>	80 <sup>(194)</sup>	28 <sup>(67)</sup>	12 <sup>(29)</sup>	2 <sup>(5)</sup>
混合 144	71 <sup>(102)</sup> 広<針	52 <sup>(75)</sup> 広>針	55 <sup>(79)</sup> 高<低	42 <sup>(60)</sup>	79 <sup>(114)</sup>	26 <sup>(38)</sup>	11 <sup>(16)</sup>	2 <sup>(3)</sup>
南方 442	59 <sup>(262)</sup> 広>針	36 <sup>(158)</sup> 広>針	63 <sup>(283)</sup> 高>低	17 <sup>(77)</sup>	74 <sup>(325)</sup>	17 <sup>(75)</sup>	11 <sup>(47)</sup>	19 <sup>(84)</sup>

表1：

樹木構成パターンの組合せと地域の特徴  
(関東地方における銅版画分析より)

つまり、関東全体を分析することにより、地域(県域)ごとに個別に把握することでは抽出することのできなかったパターンを検討できたのであり、それらパターンの組み合わせを考察することで、北・南の両系統のような地域内特性を明確化するとともに、両者の中間的地域特性をもつ屋敷林を顕在化させることにも繋がったのである。しかしながら、より広範囲の理解を試みようとした場合には、この関東地方自体も恣意的な地域選択であるともいえる。したがって、他の地域の事例との比較を通して関東地方の位置づけを行う作業は必要となろう。

### ②屋敷林の広域の理解とその位置づけ

次に屋敷林の系統について各地の事例や先行研究を参照することにより、関東地域の事例を位置づけたい。北方系・南方系という概念は、関東地方における屋敷林の地域内特性を示す概念として設定したものであるが、これは広く列島全体にも適用できるのではないかと考えている。なお、図6に示す配置モデルは、各地の調査資料・先行研究を基に作図したものである。

### 北方系屋敷林の類似例

まず、関東地方で北方系としたものは、主要構成パターンとしてスギを主体とした屋敷背後林をもつもののことを指すが、東北地方の太平洋側の平野部にも近いものがみられる。たとえば、岩手県胆沢扇状地に点在する散居の家々が持つ屋敷林が挙げられよう。

胆沢の屋敷林は、主に奥羽山脈から吹き下ろされる北西の季節風に対する備えのために設けられたものであり、「イグネ」と呼ばれるスギの単純林を敷地の北西側に列状に

配した屋敷背後林をもつ屋敷林である。



写真1：胆沢扇状地の散村景観

イグネの構成に近いものは、同じ岩手県の金ヶ崎や宮城県の仙台平野のものが報告されている。ただし、いずれの場合も仔細に見ると屋敷林の構成には違いがある。たとえば、仙台平野では屋敷背後にスギが設けられ「イグネ」という呼び名も胆沢のものとは一致するが、その構成は複層化し厚みのある屋敷背後林となっている。それに加え、東側の敷地にケヤキなど落葉高木を設け、全体としてコの字型の配置に近い状態となるなど、胆沢の事例に比べ樹木構成が若干複雑化しているともとれる。



写真2：仙台平野のイグネ

### 南方系屋敷林の類似例

次に、南方系屋敷林についてである。この系統を最も特徴づけるものは敷地を囲う高い生垣である。この南方系に近いものは、関東以西の太平洋沿岸部の地域によく見られる。生垣に用いられる樹種は、イヌマキが多く、マキの生垣は各地で散見される。たとえば、四国地方ではマキガキと呼ばれる生垣が



写真3：知覧のマキの生垣

巡らされ、九州地方では石垣とセットになったマキの生垣が現存し、集落内の通りの景観を構成している（写真3）。

これら敷地周囲に生垣を巡らせる最たる例が、台風などの四方から吹く風に対応した沖縄の屋敷林といえるであろう。平屋の建物の一階部分を完全に覆い屋根にも到達する程の高さのフクギが屋敷の周囲に植えられている。これらが連続することにより、集落内にフクギの緑道を形成することになり、通りに面してフクギに覆われた希少な景観が形成される。これは敷地規模や集住密度は異なるが、関東地方の南方系屋敷林とも相通ずるところがある。



写真4：沖縄のフクギの生垣

これらの地域の中には、関東地方にみられる南方系屋敷林と酷似する現象もみられる。それは、静岡の太平洋沿岸にみられるもので、「マキガコイ」と呼ばれるマキの生垣の配置・形態、常緑高木の存在、そして、ソテツの配置などその構成が類似している。また、静岡県には300枚近くの銅版画も残されており、それらに描かれる様子も関東地方の南方系屋敷林の銅版画の特徴と共通項が多い。これらについての詳細な検討は他日を記すこととするが、関東地方で見えてきた屋敷林の系統という概念は、もう少し広い地域にも適用できそうである。



図5：銅版画に描かれる静岡県の屋敷構え

### 混合している事例

以上の例は、地域特性や屋敷林の構成に明快な違いがあったが、もう少し複雑なものを例に挙げてみよう。日本海側には、東北地方の太平洋側と同様に散居で有名な地域がある。一つは富山県の砺波平野の「カイニヨ」

と称される屋敷林であり、防風が主目的のこの樹木群はその形態から屋敷背後林ともとれる。一方で南東からの風に備えるため敷地の3方以上を樹木群が囲う形態をとっていることも注目すべきであろう。



写真5：砺波平野のカイニョ

もう一つは島根県の簸川平野の屋敷林であり、当地域の屋敷は「築地松(ツイジマツ)」と呼ばれるマツを配した樹木群を有している。築地松の形態は、一見面状樹木が大規模化したように見えるが、最下層部にはマキの生垣があり、一体となって敷地を防護する塀状の生垣であるとも考えられる。小久保(1991)が作成した屋敷林構成モデルでも敷地の3方以上を囲う形態であり、関東地方でみてきた南方系の原型と共通する箇所が多いように見える。



写真6：斐川平野の築地松

### 3) 総括と展望

以上のように北方系・南方系の各屋敷林の構成自体は、関東地方における地域内特性であるが、関東地方全域の分析を基にした樹木構成パターンとその組み合わせから導出された北方系・南方系という概念的モデルは、列島に広く分布する屋敷林を体系的に理解する際の枠組みのひとつとして位置づけることも可能であろう。また、付属屋の出現数の傾向は、屋敷林の樹木構成パターンの出現頻度と比例関係にあることも判明した。これは、付属屋と樹木構成の組み合わせが複層的な屋敷構えを形成することを裏付けている。ただし、ここで見てきた事例が、大規模な屋敷であったことは留意しておく必要がある。

このように、明治期の史料を用い、屋敷構

えを復元的・網羅的に分析することによって、近代化による変化を受ける前の状況を共時的に把握し、かつより広範の解釈を可能とすることも判明した。

なお、本研究において当初目指してきた変容過程の考察については、十分に検討することができなかった。また、ここで示した解釈の方法が果たしてどれほどの範囲に適用するのかについては、先の事例のみでは検討が不十分である。各地の屋敷構えの構成を丁寧に把握することを目指し、様々な視点の研究を参照しつつ、より多くの事例にあたり、その構成を記録し続ける必要がある。

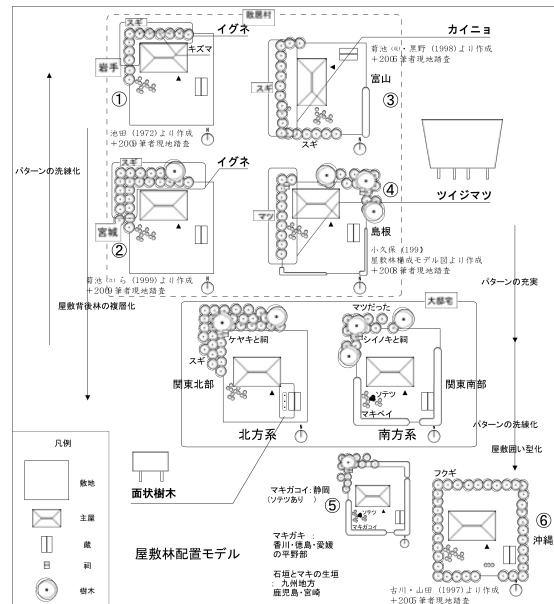


図6：屋敷配置の概念的モデル

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

①不破正仁「関東平野中部地域の屋敷林の原型とその実態－明治期銅版画の分析と現状集落調査を基にして－」芸術工学 2013, (オンライン論文集), 2013年11月, 査読あり

〔学会発表〕(計1件)

①不破正仁「埼玉県東部の平野部における屋敷林の特徴－明治期の銅版画『日本博覧図』の分析をもとに－」日本建築学会学術講演梗概集(農村計画), pp. 41-42, 2012年9月, 査読なし

〔図書〕(計1件)

①不破正仁『関東地方の屋敷林』中央公論美術出版, 338p, 2016年2月

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

不破正仁 (FUWA MASAHITO)

東北工業大学・工学部建築学科・講師

研究者番号：20618350